

河口慧海著『チベット旅行記』

本書は改めて説明するまでもなく、本邦の海外辺境探検記の嚆矢であり、またベストセラーの古典でもある。明治37年に初版が出版されて以来、英訳版や改版、再販が出版され、今日でも文庫版が健在である。探検記というよりも、当時のチベットやネパールの政治・社会・風俗などの民族誌といった方が当たっているであろうか。

明治時代後半から昭和初期にかけて、外国人の入域を厳しく禁止していたネパールやチベットに潜入した日本人は十指に近いが、彼らの殆どは国の密命を受けてのスパイ活動や政治工作を目的とした政治的潜入者、或いは宗門から派遣された宗教者であった。

一方、本書の著者河口慧海は求道者としての一心で、辺境のチベットの地に所蔵されている仏教の原典を求めべく、個人の力だけでチベット入りを果たしたのであった。今でこそチベットもネパールも外国人に開放されているが、当時の鎖国下の彼の地に密入国するには言語を絶する苦労があったことであろう。

そのため、著者は日本を発ってからチベット語の習得やラマ僧への扮装のためにインドやネパールで4年間の準備期間を費やしながらかチベットへの潜入の機を窺った後、ラマ僧に化けて単身でヒマラヤを越えてチベットに入ったのであった。関所を避けるために、道中の道は間道のまた間道という峻しい山中の道を選び、また、ラマ僧に化けたことがバレないためでもあろうか、ネパールから直接首都ラサに入ることはせず、チベット西部の聖山カイラスや聖湖マナサロワール湖に巡拝してから、ヒマラヤ山脈の北側の辺境を延々と歩いてラサに辿り着いている。

本書は、チベットに潜入するまでに過ごしたネパールでの見聞やチベットでの放浪や修行、チベットの人びとの生活や風俗、更にはチベット医となって法王に謁見した際になどに見聞きした宮廷や官庁の様子など、6年間に亘る現地での密入国の様々が記されていて興味深い。

少し横道に逸れるが、近年はネパールへのトレッキングツアーが盛んで、特にネパール中部のポカラからカリガンダキ溪谷を遡って、仏教とヒンドゥー教の巡礼地として名高いムクティナートや、更にその奥の秘境ドルポやムスタンを訪ねるコースが隠れた人気コースとなっているようだ。そのカリガンダキ街道のジョムソンの手前、名峰ダウラギリの山麓にマルファという集落があり、ここで河口慧海がチベット潜入前の3ヶ月を過ごした村長の家が今は河口慧海記念館として開放されている。小生も2007年にグンガン・ヒマールのチュルー峰に登りに行った帰りにトロン・パスを越えてカリガンダキ溪谷に下ったことがあったが、ジョムソン空港から飛行機でポカラに戻ったので、残念ながらこの記念館に行く機会を逸してしまった。これからこの方面に行かれる方は、ここに立ち寄られて、120年前の日本人の足跡を尋ねて見られるのも一興ではなかろうか。

なお、半世紀以上後にドルポの学術探検を行なった京都大学隊（川喜田二郎隊長、昭和33年）が慧海師の足跡を辿り、この旅行記が正確で、かつ鋭い観察記録であったことが報告されている（[川喜田二郎著『鳥葬の国』](#)（講談社学術文庫）参照）。

講談社学術文庫（全5巻）1978年刊（2巻に再編版は2015年同文庫刊）

[「山書の小溪」目次に戻る](#)

